

図書館報

— Seinan Toshokan pou —

2020.
April
No.188



ブックレビュー 新入生にイチ押しの1冊

1 建物に抗する書物

図書館長 北垣 徹

2 ブックレビュー

『天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い』

副学長(教育・研究担当)経済学部 国際経済学科 教授 立石 剛

『ブチ哲学』

総務課 副課長 長岡 武史

『木曜日にはココアを』

人間科学研究科 人間科学専攻 博士後期課程 2年 日吉 真美

『夜と霧』

法学部 法律学科 4年

3-4 世界の図書館

英国国立芸術図書室

外国語学部 外国語学科 教授 三宅 敦子

大英図書館

国際文化学部 国際文化学科 教授 西村 将洋

5-6 図書館から研究支援を考える

図書の視点から

図書情報課 川崎 陽奈

7 蔵書ギャラリー no.28

『Burnside, Helen Marion,

Only a Jap Dollee, Raphael

Tuck & Sons, undated』

外国語学部 外国語学科

教授 ドーハティ シンシア

2019年4月15日に起こったノートルダム大聖堂の火災から、ちょうど一年が経ちます。パリのど真ん中、セヌ川のシテ島で、この世界遺産が巨大な煙を上げて燃えさかる姿を見て、衝撃を受けた人も多いでしょう。尖塔が焼け落ちて崩落するのを眼にして、悲鳴を上げた人もいたようです。この尖塔にはヴィオレ＝ル＝デュックの名が付けられていました。彼は19世紀の建築家です。ノートルダム大聖堂は12世紀に建築が始まった中世ゴシック様式の建物ですが、19世紀半ばにヴィオレ＝ル＝デュックによって大々的に修復が行われました。彼は以前の状態の忠実な再現を目指すのではなく、新たに彫像を付け加えたり、尖塔を以前のものより高くしたりしました。今回焼け落ちたのは、今からおおよそ150年前に再建されたこの尖塔部分です。



修復中のノートルダム大聖堂 (1859)
それまで70年間、尖塔部分はない状態だった

1804年、ローマから法王ピウス7世を呼んで、ナポレオンはここで戴冠式を行います。その様子は、ジャン＝ルイ・ダヴィッドが描いた巨大な絵画を通じて、現在でもルーヴル美術館で窺うことができます。しかし絵画の伝える壮麗さとは裏腹に、当時のノートルダム内部はかなり悲惨な状態だったようで、この式典のために急ごしらえて壁を白く塗り直し、一部を覆って目に付かないようにしたらしいです。

その後、本格的な修復の機運が高まりますが、そのきっかけをつくったのは作家ヴィクトール・ユゴーです。1831年に出版される彼の小説『ノートルダム・ド・パリ』は、不具者の鐘撞きカジモドや、魅惑的な踊り子エスメラルダ、欲情に悩む聖職者フロロなど、キャラの立った登場人物たちの織りなす劇的な物語で、小説よりも映画やアニメ、ミュージカルで知っているといる人も多いでしょう——それはユゴーの代表作『レ・ミゼラブル』についても言えます。15世紀末のパリを舞台とした、情念や欲望が激しく燃えさかる悲劇の物語とは別に、小説中でユゴーは興味深い建築文化論を展開しています——物語の本筋から脱線しつつ、関連のテーマについて博学の議論を繰り広げるのは、これまた『レ・ミゼラブル』でもそうですね。

ユゴーによれば、建築とは古来より思想を表現するためのもっとも重要で一般的な手段でした。有史以前の巨石群も、古代のピラミッドや神殿も、さまざまな象徴に満ちており、積み上げられた石たちは何ごとかを人々に語りかけてきました。中世に大聖堂を訪れた人びとは、たとえ文字を知らなくても、彫像や絵画の掲げられた聖所を経巡り、詠唱や説教、音楽を耳にします。そして、荘厳な大伽藍の空気の中で、天からの光で輝くステンドグラスを通じて、イエス・キリストの受難や復活の物語を知り、偉大な神や深遠な世界の存在を感じ取った

この修復以前の大聖堂は、かなり荒れていたようです。18世紀末のフランス革命時に非キリスト教化の動きが過激化し、各地の教会や修道院の彫像などが破壊されましたが、パリの大聖堂もこの動きから免れることはありませんでした。



1832年版に収められた挿絵 (Victor Hugo, *Notre-Dame de Paris* 1482, *Classique Garnier*, 1961 [6階電動集密958/0/3-17]より)。

ことでしょう。建物とはいわば、重要な思想を人々に伝える書物であり、建物を構成するひとつひとつの石はアルファベットだったのです。

ユゴーはとりわけ、中世のゴシック建築がもつ思想的な意義を強調しています。彼によれば、先立つロマネスク様式が階級的で保守的な性格をもち、不変や統一を旨としたのにたいして、ゴシック様式は民衆的で進歩的な性格をもち、独創性や多様性を旨としました。ノートルダム大聖堂は、中世後期のこうした時代精神を体現する思想の書だったのです。

ところが15世紀になって、すべてが一変するとユゴーは言います。グーテンベルクによる印刷術の発明によって、思想の表現手段は新しいかたちを取るようになり、鉛の文字が石の文字にとって替わります。堅牢で保ちのよい建物にたいして、紙でできた書物はそんなに強いものではありません。しかし印刷によって同じものが安価に多数つくられることで、書物は四方八方と広がり、それによって伝えられる思想は最終的に、建物によって伝えられる思想よりも永続的な生命を得るのです。ユゴーによれば、書物が建物を殺し、印刷術が建築術を滅ぼすのです。

昨年の図書館報でも触れたように、15世紀半ばに登場する印刷術は16世紀から始まる宗教改革を準備しました。マルティン・ルターが批判した贖宥状(免罪符)は、聖ピエトロ大聖堂修築の資金を集めるために教会が発行したものでした。贖宥状を批判するルターの『九五箇条の提題』は印刷術によって広まり、また彼が翻訳したドイツ語聖書も、写本に比べるとはるかに安価な印刷本として普及しました。かくして、大聖堂にこだわる教会にたいして、ルターの方は聖書に依拠するという構図があり、さしずめ宗教改革は「建物vs書物」の争いだといえるでしょう。

ユゴーは彼の小説のなかで、ノートルダム大聖堂を魅力的に描き出し、ゴシック建築の意義を肯定的に説きながらも、思想を伝える手段として建物は、もはや時代遅れのメディアであることを深く認識していました。彼の小説がきっかけとなって中世ゴシック復興の動きが高まり、ヴィオレ＝ル＝デュックによる修復がなされたのですが、かつての忠実な再現ではなく、様々な意匠を重ねただけの修復は、もはや時代精神を体現する書物からはほど遠いとユゴーは感じていたかもしれません。他方で彼には、多くの人びとに新たな考えを吹き込み、新奇な感情をもたらすのは、むしろ大量に印刷されて普及していく書物だという確信がありました。ノートルダム大聖堂そのものよりも、彼の小説『ノートルダム・ド・パリ』の方が、近代において思想を表現する手段としては有効だと考えていたのではないのでしょうか。

実際『レ・ミゼラブル』(1862)などユゴーの小説は、多数の部数が印刷されて多くの読者を獲得し、また翻訳を通じて世界中に拡がっていきます。同時期に生まれた新たな思想、例えば社会主義や共産主義も、マルクス／エンゲルス『共産党宣言』(1848)『資本論』(1867～)などのパンフレットや大冊を通じて拡がり、人びとの思考を揺るかし、新たな行動へと駆り立てていきます。同じ頃、進化をめぐる思想もダーウィン『種の起源』(1859)などの書物を通じて普及し、従来の世界観を覆していきます。そのとき書物は建物にとって替わり、書物が「全世界に足場を置いたひとつの巨大な建造物」となるのです。

参考資料

ヴィクトール・ユゴー『ノートルダム・ド・パリ』(ヴィクトール・ユゴー文学館第5巻) 辻和・松下和則訳、潮出版社、2000年[6階C:通常書架 958/H98/2-5]; 『ノートルダム・ド・パリ(上・下)』辻和・松下和則訳、岩波書店、2016年[3階電動集密091/953/126-1・2]



新入生にイチ押しの1冊



『天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い』

中村哲著 NHK出版 2013年
(5階 B:通常書架 333/8262/3)

副学長(教育・研究担当)
経済学部 国際経済学科 教授
立石 剛



中村哲先生は2019年12月に逝去されました。お別れの会には多くの人が集い、それぞれが先生の平和構築に向けた偉業を称え、その別れを惜しまました。先生は西南学院中学校の卒業生でもあり、新入生の皆さんには西南学院を知ってもらい良い機会にもなりますので、本書を紹介いたします。

本書は、医師である中村先生が、アフガニスタンの三十余年にわたる活動を振り返り、どうしてアフガニスタンで医療活動を始めたのか、その後、どうして医療活動以上に、井戸を掘り、用水路を拓くことに注力したのか、そのいきさつを紹介したものです。

本書には中村先生の経験に裏打ちされた、私たちの生き方の道標になるような珠玉の言葉が刻まれています。「平和とは」「信頼とは」。容易に得られないものを、中村先生は現地で活動という重みをもって伝えています。新入生のなかには、本書に触発されて先生のように偉業を成し遂げたいと思う人も出てくるかもしれません。

しかし中村先生が三十年以上にわたる現地活動を通じて得た結論とメッセージは意外なものです。「世の為人の為に平和の礎になること」というよりも「己をわきまえ誠実に謙虚に生きること」なのです。もしも中村先生に「なぜこのような活動をなさったのですか」と尋ねたとすると「与えられた役目を果たしただけです」とさりとらとお答えになるように感じます。何かを成し遂げた人は往々にして謙虚なのです。「西南よ、キリストに忠実なれ」の神髄がここに生きています。

『木曜日にはココアを』

青山美智子著 宝島社 2017年
(1階 E, F:ブックツリー内外(ベストセラーズ)
913/6A58/4)

人間科学研究科 人間科学専攻
博士後期課程 2年
日吉 真美



『木曜日にはココアを』という本は、ある素敵な喫茶店のマスターとそのカフェに集う性別も置かれた環境も違うお客さま達それぞれの人生に焦点を当てた12のオムニバス形式の物語で構成されています。マスターやお客さま達が12の物語のそれぞれの主人公であると同時に脇役でもあります。日常生活の中に溢れていたたり、つつい見逃していたりする幸せやそれぞれの登場人物が抱える不安や苦悩、そして視点が変われば見えてくるものが変わるということを感じさせてくれる物語です。

他者の視点に立って物事を考えるということは、社会生活を送る上でも重要なことです。物語を読み進めていくと「自分だったらこうする・思う」といったことが思い浮かぶかもしれません。どれだけ他者の視点に立って想像を巡らせたとしても、自分というフィルターを通してでしか自分以外の人の視点に立って考えることはできないでしょう。この物語の登場人物も自分の友達や家族、想い人が何を考えているかを想像しますが、なかなか捉えることができず、苦悩しています。しかし、他者の視点に立とうとする姿勢そのものが大切なのだということをこの物語は私たちに間接的に伝えてくれています。

『プチ哲学』

佐藤雅彦著 マガジンハウス 2000年
(4階 B:通常書架 159/0/274)

総務課 副課長
長岡 武史



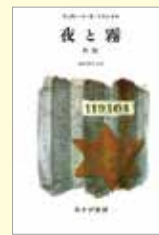
タイトルに「哲学」が含まれていますが、難しく考える必要はありません。ユーモアのあるイラストと解説で一つずつ楽しく、そして少し深く考えることで、今まで気づけなかったことに気づかせてくれる内容になっています。この図書の著者は、NHKのEテレ「ピタゴラスイッチ」「0655」「2355」を監修しているのです、これらの番組を見たことがある方は、この図書の内容がなんとなくイメージできるのではないのでしょうか。

大学では、これまでに経験のなかった世界や環境に踏み出し、新たな経験をする機会が増えてきます。その中で、多くの人の意見に耳を傾けるだけでなく、自分の意見を様々な人に伝える機会も増えてきますが、理解できないことや、なかなか思いを伝えられないようなこともあります。そのようなときに自分の考え方やものの見方の角度を少し変えてみるようなちょっとした工夫で、自分の考え方や受け止め方に小さな、場合によっては大きな変化となり、何かが閃くようなことがあるかもしれません。

考え方を試してみることで、自分の考えの整理だけでなく、他の人の意見への理解も進むかもしれません。著者はこの図書に「考えることって、楽しいかも」と記しています。少しだけ、「考えること」について考えてみてはどうでしょうか。

『夜と霧』

ヴィクトール・E・フランクフル著 (池田香代子訳)
みすず書房 2002年
(6階 C:通常書架 946/F44/2)
法学部 法律学科 4年



初めてこの本を読んだときのことはよく覚えています。私は大学一年生で、図書館から借りてきたこの本を寝る前の安眠剤がわりに開きました。不意に窓の外が眩しくなって、車のライトかと思えば朝日でした。きっと世界中に同じ夜更かし体験をした仲間はいらっしゃいます。

「夜と霧」はユダヤ人で精神科医の著者が、大量虐殺が行われていたヒトラー政権下のアウシュビッツに収容された経験をもとに書いた本です。学者である著者はある意味では冷静な眼差しのまま、極限状態におかれた人々を分析します。容赦なく他人を傷つけることもできれば、夕焼けの美しさに心を奪われ、自分の命を危険に晒してまでも他人を守ることができるのも人間です。人間の本质とはなにか、生きるとはなにかについて世界中の読者に深く考えさせてくれるこの名作は、新入生のみなさんにも多くの気づきを与えてくれると思います。

ドイツの哲学者ゲーテの名言「三千年の歴史から学ぶことを知らぬ者は、知ることもなく、闇の中にいよ、その日その日を生きるとも」がますます重く感じられる嘘と分断と対立のなかにある今の時代でこそ、ぜひ読んでほしい一冊です。

世界の図書館

[イギリス編]



The National Art Library (英国国立芸術図書室)

Cromwell Road London SW7 2RL
<https://www.vam.ac.uk/info/national-art-library/>

イギリス

外国語学部 外国語学科 教授

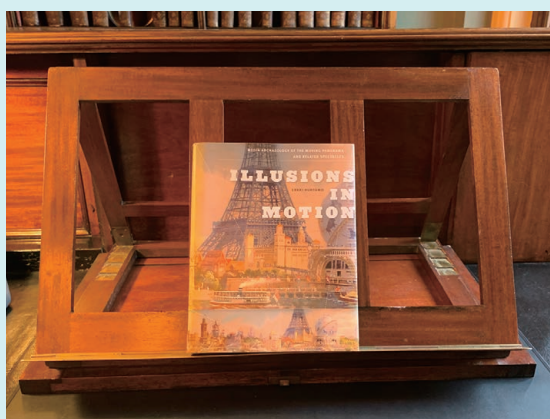
三宅 敦子

イギリスのガイドブックには必ず掲載されているヴィクトリア&アルバート博物館内に、図書室が存在することをご存じだろうか。噴水のある中庭に向かって日本美術コーナーを出たところ、右手にある階段を上った二階に、図書室への入り口がある。この図書室は入り口のところまでなら、誰でも入ることができるし写真を撮ることもできる^{*1}。図書室収蔵の資料を利用したければ、英語表記(日本在住だと、これが申請時にネックとなる)の自宅住所が掲載された電気・ガス、クレジットカード等の請求書と身分証明書類を持参し、利用カードを作る必要がある。そして訪問前に図書室のHP上でアカウントを作成し、閲覧希望の資料をオンライン予約しておくことをお勧めする。事前予約無しで当日図書室に行き、すぐに見たい資料を閲覧することは、ほとんどの場合不可能であるからだ。

ご覧のように非常に美しい空間であるため、ここでゆっくりしたい気分になるだろう。残念ながら、この図書室は研究のための図書室であるため、一般の大学図書館や公立図書館のように、レポート執筆や読書を楽しむ場所ではない。設備そのものは19世紀のものであり、いわゆる白人の目の構造に合わせた暗めの白熱球照明になっているため、残念ながらアジア人の目には非常に疲れる読書環境である。所蔵資料は、中世の写本から、18世紀のチャップ



[写真1] エントランスからみた図書室全貌



[写真2] 各机のトップは黒革で覆われており、折りたたみ式の書見台がついている。(画像は書見台利用中の様子)

ブック、1760年代以降の業務用カタログ(家具屋のカタログなど)、児童文学の書籍など、幅広い。とはいえ一番の目玉は、1851年開催のロンドン万国博覧会関連の資料だろう。

ヴィクトリア&アルバート博物館の出発点は、この万国博覧会である。万国博覧会開催に貢献したヘンリー・コールという役人が、趣味の悪いデザインの製品ばかりを製造するイギリスの製造業者と、デザインの質を考えずに製品を購入する消費者の両者の趣味を向上させようと、展示形式による国民の教育(いわゆるサウス・ケンジントン・システム)を思いついた。それが万国博覧会として結実し、博覧会終了後はいくつかのステップを得て、現在のサウス・ケンジントンに博物館として誕生したからである。

この図書室収蔵の資料は、何世紀も前の挿絵を含む図版資料が多いため、閲覧には厳しい規則がある。まず鞆類はすべて一階にあるクロークルームに預けること(大きな物は有料)。図書室内に持ち込めるのは鉛筆とPCのみ。のど飴・ガムから水に至るまで、飲食料品はすべて持ち込み禁止。疾病により水分摂取が必要な場合のみ、申告後ボトル入りの水の持ち込みが認められる。非常に不便だが、19世紀のデスク^{*2}で当時の資料を閲覧するというタイムスリップ感覚が味わえる数少ない図書室である。



【写真1】大英図書館の外観。右奥の城のようなネオ・ゴシック建築がセント・パンクラス駅で、そのさらに隣に『ハリー・ポッター』の聖地キングス・クロス駅があります。『ハリー・ポッター』シリーズは1997年に刊行開始されたので、1998年に全面移転した現在の大英図書館と同時代の作品なのです。】

The British Library (大英図書館)

96 Euston Road, London, NW1 2DB United Kingdom
<https://www.bl.uk/>

イギリス

国際文化学部 国際文化学科 教授

西村 将洋

大英図書館はかつて大英博物館の一角にあり、カール・マルクスや南方熊楠が通った伝説の旧閲覧室は現在も公開中です(三宅敦子先生が「図書館報」161号で紹介されています)。一方、今回の主役は、『ハリー・ポッター』の愛読者が聖地とするキングス・クロス駅「9と3/4番線」から徒歩約5分、1998年に全面移転したセント・パンクラスの大英図書館です。在外研究中のロンドンから報告します。

大英図書館には一般の図書館と異なる側面があります。イギリスを代表する国立図書館として、所蔵文献や蓄積された知識をどのように社会に還元して役立てるのか、という公共的な使命です。

この点は特に印象的で、学術講演会や作家を招いたイベント、秘宝の書物を公開する常設展や、知的好奇心を刺激する特別展、小学生から一般市民さらには博士課程の院生まで対象とする段階別の館内ツアーや特別講座、あるいは図書館のデータを活用したビジネス・サポートなど、実験的な企画が目白押しです。

しかも施設面では、自習席、書店、オリジナル・グッズが並ぶショップ、カフェやレストランなどが整備され、多様な利用者がゆっくり滞在できる設計となっています。

こうした革新性と開放性の共存が大英図書館の特徴の一つです。未来に向けて図書館に何ができるのか？そんな壮大な

問いに答えるヒントも見つかるかもしれません。

以上是一般開放エリアですが、イギリスが世界に誇る所蔵文献を手にとるには、人文、科学、アジア・アフリカ、新聞、地図、音楽など計10室からなる閲覧室に入る必要があります。

閲覧室の手続きは、図書館のホームページでアカウントを作成し、提出書類を準備したら、司書との面談を経てリーダー・パスが発行されます。

本を申し込んで手元に届くまで最速で70分、分館の文献は2日以上を要します。面談については、以前はとても厳しかったのですが、近年は簡略化の傾向もあるようです。しかし提出書類のチェックは厳密ですし、ホームページの熟読と十分な事前準備は必須です。

一般開放エリアと真逆で不便だな、と思う人もいるでしょう。でも、私は閲覧室の利用を断然おすすめします。一般エリアの自習席は常到大混雑ですが、閲覧室には静謐で独特な雰囲気があり、ゆったりしたイスと重厚なデスクが並びます。

そこで自分のためだけに準備された本物の歴史的な書物と対面する時、

気軽にネットを読む時と全く異なる、不思議な瞬間が訪れます。『ハリー・ポッター』で登場するタイム・ターナー(逆転時計)の魔法ように、時間の流れを一気に飛びこえる稀有な読書体験が、あなたを待っているからです。



【写真2】ジョージ3世のコレクションを収蔵した館内のブック・タワー。特別にThe King's Libraryと名づけられています。下の方には一般開放エリアの自習席も見えます。一方、事前手続きが必須の閲覧室(Reading Rooms)は写真撮影禁止なので大英図書館HPをご覧ください。】

図書館から研究支援を考える

図書の視点から

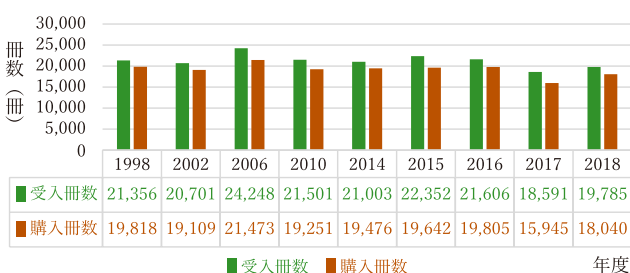
図書情報課 川崎 陽奈

図書館では現在、約117万冊の図書を所蔵し、毎年約2万冊の資料を新たに受け入れています。近年、学術雑誌については価格が上昇し、購読の維持が難しくなる事態が発生していますが、図書の状況はどのように変化しているのでしょうか。今回は1998年度以降の20年間の本学における図書の受入がどのように変化したのかを見ていきたいと思います。^{*1}

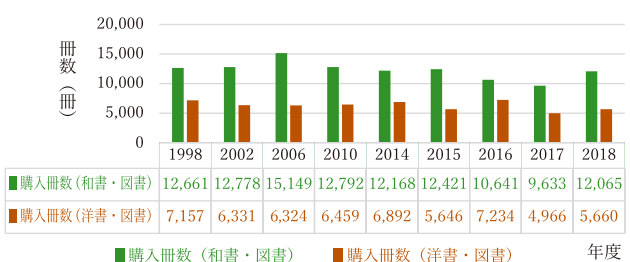
1. 受入冊数は減少

そもそも図書とは「文字や図表などが記載された紙葉を冊子体に製本した資料」^{*2}を指しており、これとは別に電子ブック（電子書籍）という「従来図書の形で出版されていた著作物を、電子メディアを用いて出版したもの」^{*3}やDVD等の視聴覚資料があります。

【資料1】受入・購入冊数



【資料2】和洋別購入冊数（図書）



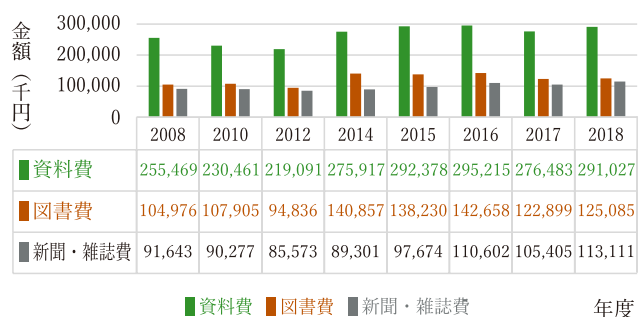
【資料1】は1998年度以降の資料の受入冊数と購入冊数の変化を示したものです。年度による差はありますが年間約21,000冊程度の資料を受け入れてきました。それが2017年度に初めて受入冊数が19,000冊を下回り、翌2018年度も19,785冊と20,000冊を下回りました。2年続けて20,000冊を下回ったのは1998年度以降では初めてであり、今後どのように変化するか気になるところです。また、購入冊数も受入冊数と同様に2017年度以降19,000冊を下回っており、2017年度は2016年度比で約3,800冊、2018年度は1,700冊減少しています。購入冊数は長らく19,000冊程度で推移していましたが、ここ数年の間は大きく減少しており、これが今後も傾向として続くのかを注視していく必要があります。では、購入冊数の変化に和洋で差はあるのでしょうか。

【資料2】は和洋別の図書の購入冊数の変化を表したものです。和洋ともに減少傾向にありますが洋書の方が、減少幅が大きいことが見て取れます。

2. 資料費は増加

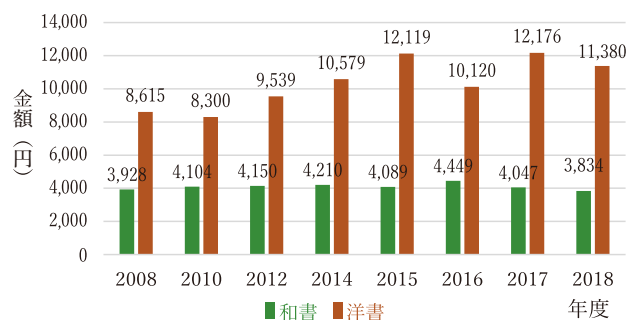
最初にも述べた通り近年学術雑誌価格の上昇が指摘されており、本学の場合も2008年度には約9,100万円であった新聞・雑誌費は2018年度には約1億1100万円と10年間で約20%増加しています。

【資料3】資料費の変化



一方、図書費はどうでしょうか。図書費についても2008年度が約1億円であったのに対し、2018年度は約1億2500万円とこちらも10年で約25%増加しています。従って、図書の受入冊数は横ばいからこの数年は減少傾向にあるものの、図書費自体は増加していることが分かります。和洋それぞれにおいて、購入に要した費用を購入冊数で割り1タイトルあたりのおおまかな価格を算出すると、【資料4】のようになります。（電子ブック・視聴覚資料は除く。）和書には大きな変化が見られないのに対して、洋書は2008年度には1冊あたり8,615円だったのが、2018年度には11,380円と率にして32%価格が上昇しています。図書の購入に当たっては通常の資料よりも高額な雑誌のバックナンバーを購入する場合もある等他の要素も考えられるため、単純な比較はできませんが、全体で見れば1冊当たりのコストが増加しているといえるでしょう。

【資料4】1冊あたりの価格



3. 電子ブック

この20年間の図書を取り巻く状況を分析する上で電子ブックの存在は欠かせません。最初にご紹介した図書の蔵書冊数（約117万冊）にもこの電子ブックは含まれています。本学では2013年度に電子ブックの購入を開始しました。

【資料5】電子ブックの購入状況

【金額】						
年度	2013	2014	2015	2016	2017	2018
電子ブック資料費(円)	674,893	3,270,416	10,931,961	15,753,808	14,088,028	9,829,817
和書(円)	491,520	1,916,252	3,225,178	8,837,052	7,573,800	7,786,503
洋書(円)	183,373	1,354,164	7,706,783	6,916,756	6,514,228	7,786,503
購入費(円)	123,070,599	131,754,755	123,058,369	124,476,679	103,776,230	114,899,784
電子ブックの占める割合(%)	0.5%	2.5%	8.9%	12.7%	13.6%	8.6%

【点数】

年度	2013	2014	2015	2016	2017	2018
電子ブック点数(点)	84	1,315	2,621	2,420	1,374	326
和書(点)	68	1,081	145	1,975	1,092	189
洋書(点)	16	234	2,476	445	282	137
購入点数(点)	20,025	19,760	18,623	18,366	15,227	18,192
電子ブックの占める割合(%)	0.4%	6.7%	14.1%	13.2%	9.0%	1.8%

【資料5】は法科大学院分館の予算も含めた電子ブックの購入の状況です。2013年度の購入点数はごく僅かでしたが、2014年度から2016年度の間は学部の予算でまとめて購入されたこともあり、年間約1,300～2,600点の電子ブックが購入されています。また購入費全体に占める電子ブックの割合は2015年度以降約9%から14%を占めています。紙の資料と電子ブックは同じ図書費から支出しているため、もし今後も増加するのであれば紙の資料と電子ブックの購入バランスがどうなるのか変化に気をつける必要があります。では、利用状況はどうでしょうか。本学で最も多く資料を購入している「Maruzen ebook Library」に掲載されている電子ブックについて、年間のアクセス数を調べたところ以下の通りとなりました。【資料6】購入点数は年度によって大きな差はありますが、利用自体は徐々に増加しています。とはいえ、1年間に1度もアクセスがない資料が大多数であり、利用を促進するには今後利用方法等について広報を促進する必要があるでしょう。

【資料6】電子ブックのアクセス数

年	2014	2015	2016	2017	2018	2019
アクセス数	100	464	5,417	3,732	2,070	2,191

更に今後の課題として電子ブック特有の問題もあります。例えば、本学では電子ブックも資産として計上し通常の図書と同じように扱っていますが、電子ブックは購入しても目に見える形の「モノ」は存在せず、万が一電子ブックのサービス提供元によるサービスが停止されたり、事業の継続ができなくなった場合に、これまで購入してきた電子ブックをどう扱うのかというのが課題です。この他、本学では電子ブックの利用にあたっていくつかのプラットフォームを利用できますが、プラットフォームが増えすぎると適切な資料が探せなかったり、読みたい資料にたどり着くまでに時間がかかる可能性がある他、操作方法がそれぞれで異なるために利便性が低くなるという問題もあります。ディスカバリーサービスの活用によってこの問題はある程度解消されているはずですが、購入の時点でもどこから購入するのかは確認が必要です。もう一つ、電子ブックの様々な購入モデルへの対応も課題となっています。本学ではタイトルごとに1点ずつ電子ブックを購入していますが、実際には他にも様々な購入方法があります。例えば、PDA(Patron-Driven Acquisitions)^{※4}などの利用実績に応じた購入方法や、購入ではなく一定期間一定数の貸出の制限が付いた状態で購入する方法、利用があった時点で都度利用料金が請求される方法等があります。これらの利用に応じて購入、支払いをする方法は、1点ずつ購入するよりもより利用者のニーズをとらえやすくなる反面、種類によっては選書という過程を経ないため図書館の蔵書構成のバランスに影響が出ないか懸念がある他、本学独自の問題として資産への計上の際にどのように扱うのかといった課題も存在しています。

4. 出版社

ここまで受入冊数、資料費、電子ブックという視点から図書についてみてきましたが、それ以外の視点では図書の状況はどのように変化しているのか、一例として購入している資料の出版社の変化を調査しました。本学において洋書の出版社別受入点数は以下のように変化しています。

【資料7】出版社の変化

1998年度			2018年度		
受入冊数	出版社	割合	受入冊数	出版社	割合
920	West Pub. Co.	12.7%	461	Routledge	7.7%
173	Routledge	2.4%	449	Oxford University Press	7.5%
129	Oxford University Press	1.8%	194	Cambridge University Press	3.2%
126	Cambridge University Press	1.7%	153	Palgrave Macmillan	2.6%
122	Macmillan	1.7%	131	Springer	2.2%
93	Hon-No-Tomosha	1.3%	87	Schmidt Periodicals GMBH	1.5%
70	Prentice Hall	1.0%	85	Kraus Reprint	1.4%
66	Greenwood Press	0.9%	72	University Microfilms International	1.2%
66	Gallimard	0.9%	63	C.H.Beck	1.1%
65	Ecole française de Rome	0.9%	54	American Psychological Association	0.9%
61	Academic Press	0.8%	51	Osprey	0.9%
58	C.H.Beck	0.8%			

1998年度はWest Publishing からの購入が飛びぬけて多いですが、これは雑誌のバックナンバーをこの年にまとめて購入したことによる特異なものです。それを除くと、1998年度から2018年度の20年間でRoutledgeとOxford University Pressの書籍の受入冊数が大きく伸びているのが分かります。1998年度はWest Publishing を除いた上位3社が全体の5.9%を占めていたのに対して、2018年度は上位3社が全体の18.4%を占めています。この20年間で海外の出版社の統合等も起こっている中で、本学の場合は特定の出版社の資料の購入が増えているのが見て取れます。

5. 今後は如何に

ここまで20年間の図書に関する状況の変化を見てきました。学術雑誌だけでなく図書においても研究を取り巻く情勢の変化が各種数値に反映されているようです。最後にまとめると全体では受入冊数は減少、資料費は増加している他、電子ブック導入後は冊子体の購入費は減少し、その分電子ブックの購入費は増加傾向にあります。

電子ブックについて様々な購入モデルがあることをご紹介しましたが、こうした購入モデルの変化への対応に当たっては検索システム等のシステム面でも変化に対応していく必要があります。更に費用の問題でいえば資料費だけでなく各種管理コストも増加しています。電子ジャーナル等を含めた電子資料への対応として、ディスカバリーサービス(電子を含めた統合検索システム)やリンクリゾルバ(各データベース間のリンクサービス)、文献管理システム(電子も含めた、文献管理が可能)を導入していますが、これらを機能させるためには新たな人手も必要です。また、新しい管理システムの導入も検討しています。

様々な電子資料が登場する中でそれらを管理するシステムは必要になってきますが、一方で冊子体を管理するためのコストを大幅に削減することもできません。紙から電子への変化も含め様々な変化が起きているのは確かですが、所蔵している資料が全て電子資料になるような変化は起こらないでしょう。少しずつ変化する状況に、いつのように対応していくのか、どこまで対応できるのか、一つの図書館では中々上手く対応できない部分もあり他大学との連携等も考えていく必要があるかもしれません。

20年間の変化を見ていく中で様々なことを考えましたが、今後も所蔵資料を把握、整理、提供していく仕組みを維持するとともに、資料や研究を取り巻く変化に対応できるよう分析、改革を進めていきたいと思います。

※1 今回の分析に当たって特に断りの無い場合は法科大学院を除いた図書館本館の値を使用しました。

※2 「図書」図書館情報学用語辞典 第4版, Japan Knowledge, <https://japanknowledge.com>(参照2020-3-24)

※3 「電子書籍」図書館情報学用語辞典 第4版, Japan Knowledge, <https://japanknowledge.com>(参照2020-3-24)

※4 未購入(未契約)の電子書籍を利用者に利用してもらい、その利用がある一定の条件(トリガー・ポイント)に達した段階で図書館がそれを購入する仕組み。
日本図書館情報学会研究委員会編『電子書籍と電子ジャーナル』95頁(勉誠出版 2014年)

『Burnside, Helen Marion, *Only a Jap Dollee*, Raphael Tuck & Sons, undated』

[6階 R:貴重書庫 726/5/90]

今回、当図書館蔵のBurnside (1841/4?-1923)の児童書*Only a Jap Dollee*を紹介したい。この本は、色彩鮮やかな服装の男の子が自分そっくりの小さな人形を抱いた姿に型取られている。裏表紙にはその男の子の後ろ姿が描かれている。当時としては非常に珍しい形状の本である。出版年は不明だが、Burnsideの生涯やこの物語の描写から判断すると、1890年頃ではないかと推測される。

この作品は、“The best of friends must part you see. So, fare you well, dear Jap Dollee! (親友とさえ別れる定めなの、わかるでしょ、さようなら、いとしいジャップ人形ちゃん)”といった、物悲しい愁いを帯びた表現で終わる点で子供向けのお伽噺とは異なる。この本は、世界の多様な民族を紹介する企画の一環で出版された、異国情緒豊かな子供向けの本と考えられる。だがこの絵本では実際の日本人あるいは日本文化の描写が正確でない上に、英米とは異なる、あるいは、そこから逸脱した、言外に「劣る」という含みを帯びた文化圏の人びととして「他者化」されているように思える。

欧米人がアジア諸国を理解するキーワードは、Edward Saidが批判した「オリエンタリズム」である。19世紀後半、鎖国後の日本に対する関心が高まり、日本人や日本の事物が魅力的なものとみなされるようになった。大英博物館やボストン美術館に、のちに第一級と称賛される日本美術品がさかんに収蔵されたことはその現れである。

日本が欧米に知られはじめた当時の読書好きな子どもの興味を引いたのは、この本に滲み出る「オリエンタリズム」なのではないか。この本には、イス・ネコ・カエル・いたずらといった当時の子どもの遊びとして普遍的な要素と共に、文化固有の要素が含まれる。たとえば団扇を使ったり、常にお茶を飲みつづけるといった日本の習慣である。そこには当然ながら「オリエンタリズム」的描写が垣間見える。(馬)車をけん引するものとして、欧米の馬の代わりに“a little man”が当てられている。この“a little man”は多義的である。一方で「子ども」を大人として遇する賛辞的表現と解釈されると同時に、他方で(アジア人に対する)短軀ゆえに子どもみたいな人々と軽視するオリエンタリズム的表現とも解釈されるからである。

オリエンタリズムのさらなる特徴として、それぞれに異なるアジア諸国の社会と文化が混同

される傾向が挙げられる。この本は日本について書かれているにもかかわらず、日本的なものと中国的なものとは混在している。三つ編みの子どもLie-BoとLe Wainは、明らかに中国名を連想させる。日本と中国の事実と幻想の綱い交ぜになったこのような描写がオリエンタリズムの骨格を形成している。興味深いことに、散りばめられた日本の要素は、当時欧米諸国で開催された万博で紹介された日本文化の表象そのものであった。

さて、この本のタイトルの“Jap”なる表現に驚く人がいるだろう。*Oxford English Dictionary*によると、“Jap”の初出例は1880年代に遡る。“Only a Jap Dollee”が執筆された時代に当たる。当時、“Jap”という呼称には特にネガティブな意味合いがなく、英国出身者への呼称“Brit”同様、日本人に対する中立的な俗称であったようである。“Jap”は第二次世界大戦時に、新聞の見出しやプロパガンダで日本を敵視して頻繁に使用されるようになったために、侮蔑的な含みを持つようになった。戦後、教師が生徒に行う抜き打ちテストを、アメリカでは“Jap quiz”と呼んだ一時期があった。しかし今ではそのような表現は民族的偏見を助長するという理由で使えなくなった。

このように、私達が今日最も不快感を抱くような言葉や呼称は、19世紀後半から20世紀前半にかけてはおそらく侮蔑的だとは思われなかったのだろう。またその一方で、“only”や“dollee”ということばには、日本人形ひいては日本を取るに足らない存在とみなす差別的な含みがある。議論の余地はあるかもしれないが、これらにもオリエンタリズムが滲み出ていると筆者は考える。

このように、小さな絵本からも思いを巡らせ学ぶべきことがいくつも見つかる。この本に興味を持たれた方は、どの部分が日本風であり、また中国風なのかを確かめて頂きたい。

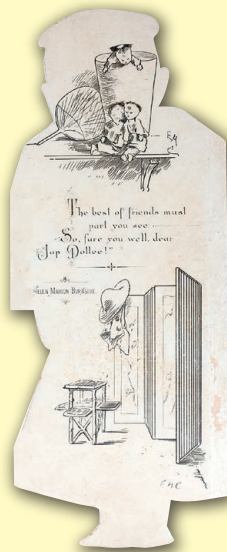
参考文献

Dower, John W. *War without Mercy: Race and Power in the Pacific War*, New York: Pantheon Books, 1986.

Fussell, Paul. *Wartime: Understanding and Behavior in the Second World War*, Oxford: Oxford University Press, 1989.

OED = Oxford English Dictionary Online, Oxford: Oxford University Press, Online version with revisions <<http://www.oed.com>> accessed Dec. 20, 2019.

訳: 西南学院大学 非常勤講師 森山 千鶴



編集後記

今年度のスタートは、学生の皆さんだけでなく、教職員にとってもこれまでに経験したことのないものとなりました。通常であれば、新入生の喜びと緊張が入り混じったキャンパスは、活気にあふれているところですが、桜が満開になったにもかかわらず、キャンパスは人通りが少なく、静かなため、不思議な感覚に陥ってしまいます。普段は読書をする時間がない生活を送っている方が多いのかもしれませんが、このような状況のなかで制約があるときだからこそ、ゆっくりと読書をする時間に充ててみてはいかがでしょうか。(T・N)

西南学院大学図書館報 No.188

2020年4月30日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/>

図書館報バックナンバーも上記サイトに掲載しています。